



- 1 西岡さんと共に美術館から外へ
- 2 「梅の花」の色と香りに気づく西岡さん
- 3 西岡さんのカフェまでの動きに密着
- 4 粘土でイメージを伝える原田さん
- 5 研修会講師の鎌倉さん

去る2月25日、茅ヶ崎市美術館が企画するマルバ・ワークショップの第1回が開催された。マルバ (MULPA: Museum UnLearning Program for All/ みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—) は、(公財)かながわ国際交流財団の呼びかけで神奈川県内の美術館4館(神奈川県立近代美術館、茅ヶ崎市美術館、横須賀美術館、平塚市美術館)と芸術祭連携団体(相模湾・三浦半島アートリンク)等を主体として、平成28年度より運営を始めたプラットフォーム型のアートプロジェクトである。

マルバのメンバーとなっている4つの美術館では、美術館の外にある多様な人々・団体とつながりながら、同じ地域にいる定住外国人や障がいのある方々を、教育普及プロジェクトを通じて「包む」ことが意識されている。

今回を皮切りに約半年間をかける茅ヶ崎市美術館のプロジェクト(全5回)は、茅ヶ崎駅から茅ヶ崎市美術館までの道のりがわかりにくいという「マイナス」(課題)を、「インクルーシブデザイン」の手法を活用して、「プラス」(価値)に転換していくという、社会実験的なものである。

障害者を含む「感覚特性者」が歩む茅ヶ崎市美術館までの道のりを、さまざまな技

を持った表現者が同行し、その行程中の「感覚特性者」の心や体の動かし方を観察した後、「価値」が何であるかについて、感覚特性者自身の「感情マップ」(アクションの流れに沿って感情の起伏が見える化したもの)を作成することで共有する。その次のプロセスでは、表現者が「例えば、こんなかたち」といった感覚で、共有したい「価値」について、それぞれの感性や技を用いて、「価値」を共有するための「創作」を行う。

第1回のワークショップでは、前段でマルバの研修会として、「インクルーシブデザインを美術に活用する方法」と題した、鎌倉丘星さん(株インクルーシブデザイン・ソリューションズ取締役/特性:視覚)による講演があった。講演後、聴覚を特性とする西岡克浩さん(美術と手話プロジェクト代表)が、茅ヶ崎市美術館から出て、まちなかにあるカフェで昼食を食べ、美術館に帰ってくる行程を、金箱淳一さん(メディアアーティスト)と原田智弘さん(音空間デザイナー)の表現者のお二人、本プロジェクト企画者である藤川悠さん(茅ヶ崎市美術館学芸員)、インクルーシブデザインアドバイザー鎌倉丘星さん、テクニカルサポーターの久世祥三さん、アートディレクター坂本茉莉子さんの4名のコアメンバー

が、その様子を観察した。

西岡さんは美術館の敷地に戻ってくる際に「梅の花」を見たが、その後の西岡さんの「感情マップ」の作成によって、「色と香り」が共有すべき楽しめる「価値」の一つであることが確認された。表現者等はそれぞれに価値を共有し、粘土にて創作を行った。

執筆者である私もまた、西岡さんを美術館⇔カフェの道のりの間、観察させていただいたが、西岡さんがまちなかを歩くプロセスで、同行者が多いことを「不快」ではなく楽しいと感じていたことがわかり、目からうろこが落ちる思いがするとともに、このインクルーシブデザインの手法がさまざまな「コト」への汎用可能性が高いことに気が付いた。

次回以降、本プロジェクトのメンバーとして、さまざまな感覚特性者とアーティストのコラボレーションが茅ヶ崎での新しい価値を生むことに積極的に関わりたいと感じた。

(第2回ワークショップ以降の開催報告も執筆者を替えて連載します)
(主催)公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団/公益財団法人かながわ国際交流財団
(協力)湘南工科大学総合デザイン学科/株インクルーシブデザイン・ソリューションズ
マルバ特設サイト: <http://www.kifjp.org/mulpa/>